

ともはつよし社

デ・グラッベ著

久保田榮吉譯編

世界攪亂の
法律

ユダヤの「タルムード」

破邪顯正社發行

ともはつよし社

序じよ

一九一七年まで、世界の一大強國をもつて誇つた帝制ロシヤは、何が故に崩壊した乎？ しかも國家興亡の岐路に立つて外敵と血の死闘を續けてゐる眞只中に、どうして革命が勃發した乎？

この原因に就ては、勿論幾多の事情があるが、編者は結論を劈頭に提げ來つて言ふ！「この國家崩壊の革命を齎らした最大因由は、ユダヤの陰謀にある」と。何となれば、彼等が過去數千年にわたつて踏襲してきたその信條たる

「各國家内に紛争を起さしめ、或は國家と國家とを相戦はしめ、而して其の間隙に乗じ、その國家の富を根こそぎ吸收するに努めて、政治的、經濟

的基礎を破壊し、國家の潰滅を謀ること』

『國民に虚榮と奢侈とを追求せしめ、風俗壞亂をはかり、飲酒と頹廢的享樂に誘致して、愛國心を喪失せしむる強度の魔藥を振り撒くこと』

「戦争、革命、政治、經濟、宗教等の擾亂は、われくが努力してゐる世界統一の宿望を達成する機運を促進するものである。殊に醫師は、各家庭に出入する機會が多いので、ユダヤ永劫の仇敵たるキリスト教徒の奪命に努力せねばならぬ」

の數々を實現したからである。しかもこれは其の信條の眞の一端にすぎないが、これ等の信條は、彼等の祖先が幾多の年月を閲して編み出した宗教『タルムード（經典）』の教訓を遵守して、世界征服の陰謀をもつて、他民族を根滅せんとして來てゐる歴史が立證するからである。

彼等が、この神人俱に赦さぬ教訓を貫徹せんがために、他民族に向つて突進する態は、正に血に飢えた猛獸そのものである。金を收集するための貪婪非道

の蠻行も正義と解し、國家破壊のための總ての陰謀術策も神が選び給ひしユダヤ人の神聖なる天職としてゐる。

元來ユダヤ人は、西曆七十年ローマ帝王によつて國を亡ぼされて以來、恰も蜘蛛の子の四散せし如く、各國を轉々流浪所謂散住の民として今日に至つたのであるが、正義、人道の觀念を他民族と異にする彼等は、到る處に於てその國民性を發揮しては、壓迫され、蛇蝎視され、中世紀に於て遂にスペイン、フランス、オーストリアを追放されるに至つた。ロシアには最初西曆千二、三百年頃より、ギリシヤ方面より流れ込んだが、その後ドイツ、ポーランド、ウクライナの各所より、大々的團體を組んで移住したのである。爾來ロシア人との間に幾多の紛争が惹起されたが、遂に一九一四年、彼等の陰謀によつて世界大戰が勃發して、この機會に乗じてロシアの革命を起し、帝制ロシアを崩壊せしめたのである。

ユダヤ人が、この機會にロシア大帝制を破壊するために、政治、經濟方面の策動は勿論、なかんづく國民の愛國心喪失に全力を傾注した。そして國民を墮落させるために、淫蕩享樂、風俗壞亂の亡國的邪道を行進すべき進軍喇叭を吹奏した。この喇叭に歩調を合はして、颯爽と勇進した軍隊は如何なる部隊であつた

か？ これ等の部隊は上層階級、資産家、重役と高級社員、戦時成金、時代の波に乗つた労働者の成り上り者、暗成金及び脱税者、大學生、虚榮の強い女性、尊い女の誇りを安價に鬻ぐ娘子軍等々の混成聯合部隊であつた。

勇敢なるこの部隊の出勤によつて、當時のロシヤの都會はどうであつたか、編者の在留してゐたペトログラードの如きは、レストラン、カフェ、喫茶店、酒場、劇場、活動等の歡樂境は勿論、ホテル、宿屋、下宿屋までが大入超満員の繁榮を呈した。この亡國的變態景氣は、物價の高騰に伴ふ兌換券の膨脹に起因したことはない。

この氾濫した兌換券の吸收を憂慮したのは、政府要路の重職にある憂國の大官であり、好機逸すべからずとして、ニタリと薄氣味の悪い冷笑を洩らしたのはユダヤ人であつた。

政府は國家の危機を叫んで、國防献金、公債の消化、物資の節約、産業の擴充、預金や保險の獎勵に懸命努力しても、ユダヤ人の撒いた猛烈な、個人主義、利己主義、享樂主義の魔藥に、愛國の精神も、憂國の志も、麻痺してしまつた。亡國的非國民の耳には、蚊の音ほども、殆んど聽従するものがなかつた。そ

してたゞく眼を邪淫に光らして、一路刹那的享樂と淫蕩氣分とに浮れ進んだ。この亡國的非國民の心理である淫靡遊蕩の眞髓をつかんだユダヤ人は、忽ち全市の主なるレストラン、カフェ、テヤトル、ホテル等を手に入れた。そしてレストランやカフェの一部を改造し、舞臺と待合室とを設備したのである。この舞臺からは、夕刻になると、嚙啞たるオーケストラの音や猥褻極まる歌詞が流れ出て、これ等亡國の民を恍惚たらしめた。

便所の側に新設した四面を鏡で張つた待合室には、二、三十人の賣笑婦が控え、用を達す振りして、その實、女を漁る老若の男を誘惑した。この光景はひとり編者ばかりでなく、當時在留した邦人の直接目撃したところであつて、戦時下のロシヤの首都がこの状態では、もはや戦争には勝目がない、また戦争に負けなくとも、必ず國內的に何か重大な事件が勃發すると豫想された。

果せる哉慘烈極まる革命となり、さしものロマノフ王朝も一朝にして崩壊した。これは前述の如く全くユダヤ人の陰謀であり、そしてその思ふ壺に嵌つたわけである。

『他山の石以つて、わが玉を磨くべし』勿論、わが國難は彼等ユダヤ人の策謀の

如きに微動だもするものではないが、併し現下のわが國狀はどうか？ 五年に

亘る聖戰と、東亞共榮圈確立の大聖業を阻止され、延いては萬邦無比のわが國家を焼き拂はんとする火の粉が、南北の烈風に煽られてもの凄く振りかゝつてゐる秋である。

社よはつとも

この肇國以來の一大國難に遭遇せるわが國民は、敢然起つて國策の貫徹と、火の粉の拂ひ除けを斷行せねばならぬ。祖國擁護の前には如何なる艱難辛苦も物の數でない。一旦緩急あつて義勇公に奉ずるのみである。然るにおや、都市に於ける人心の動きは、この國難を克服せんとする姿であらうか？ この姿は、ユダヤ人の振り撤いた魔藥に魅惑された崩壞前の帝制ロシヤ國民の實情に髣髴たるものはないか？ われ等は斷言する。一部國民の間にかゝる者がある——。そしてこれは眼に見えざるユダヤ人の策謀であることも判る。實にユダヤこそ、現下のわが國に最も警戒すべきパチルスである。

本書は、何故にユダヤ人が、非ユダヤ民族に對してかゝる辛辣なる毒手を振ふにいたつたかといふ原因、即ちその歴史的事實を詳述し、併せてこれを警戒すべき要點を説いたものを、ロシヤ帝制時代のデ・グラツベ將軍が譯出した『ユ

ダヤ人とタルムード』を翻譯して、これを主體とし、樋口艶之助著「猶太禍」を参考に編したものである。

原書に拘泥するあまり、聊か行文に難解の點あるを免かれぬが、今日の時局に對し一片耿々の至情禁ずる能はず、敢えて非才を顧みず世に問ふた次第である。そしてこれが幾分でも、ユダヤ禍の深化を防衛する資料ともならば、編者の本望これに過ぎない。

昭和十六年十一月

久保田榮吉

翻譯者より

社 辻つはとも

フラウイアン・ブレーニエの著書の譯本を讀者に提供するに當つて、余はユダヤ人問題に興味を有する諸君に一應著者を紹介する義務がある。尤も現代に於て、この問題に興味を有しない者は恐らく多くはなからう。

この問題は、これを如何なる角度から視てもその重大性を否む事は出来ない。世界のあらゆる國家に普及しつゝ、あるユダヤ排斥の傾向は安定性を失つた世界的情勢に最も深刻な脅威を與へてゐる。今や誰もがユダヤ問題を話頭に上してゐる。そして誰もがこれを種々に論議してゐる。しかし、この問題の本質は何であるか、斯くまで皆から嫌惡されてゐるユダヤ人は、抑も何者であるかを、知つてゐる者は多くなからう。

惟おもふに、ユダヤ人じんを知らんとせば、先まづ概要がいようなりともその歴史れきしとその世界せかいとを知らねばならぬ。そしてこの要求ようきゆうを充みたし得えるものは本書ほんしょである。本書ほんしょはバビロン幽囚ゆうしゆうい以後いごに於おけるユダヤ人じんの歴史れきしの本質ほんしつを最もつとも正確せいかくなる資料しりようによつて簡潔かんけつに叙説じよせつし、且かつユダヤ人じんの世界観せかいかんの本質ほんしつを、そのバイブル諸書しよしよに基もとづいて概論がいろんしてゐる。

本譯文ほんやくぶんを、余よは、一九一九年にポリシエウエキのために悶死もんしせしめられたるレフ・リウオウイチ・キスロフスキー氏しの、輝かがやかしき記念きねんにさゝぐ。

伯爵はくしやく デ・グラツベ

はつこうしゃ 發行者より

社よしつよはとも
余の敬愛する親友、故ドウミトリイ・ミハイウイチ・グラツベ伯の翻譯にかゝる、ユダヤの『タルムード』の好著を發行するに當り、余は深き痛恨を禁じ得ざるものである。

國家多事にして而かも人材の乏しいわれ等の時代に際し、ドウミドリイ・ミハイウイチの如き人物の逝去せしことは、特に余等をして悲痛な哀惜を感ぜしめるものである。何ごとにも極めて敏感で、推理力の鋭敏であつた伯は、マツソン結社とユダヤ人の危険を直ちに看破して、その生涯の最終數年を、この怖るべき妖禍に對する抗戰に貢獻したのである。

余は、伯の崇高なる文化的仕事を繼續する機會に恵まれたことを欣幸とするも

のである。

公爵^{こうしやく}
エム・ゴルチャコフ

目次

ともはつよし社

序 15

翻譯者より 22

發行者より 24

緒論 29

第一章

古代に於けるイスラエル民の反逆 35

第二章

バビロン幽囚とパリサイ派 55

第三章 だいさんしやう

キリストとパリサイ派 は

87

第四章 だいやんしやう

キリスト教徒迫害の基因 きいんはユダヤにある

93

第五章 だいごしやう

復興 ふつこうせられたる最高評議會 シネドリオン及び「タルムード」

112

第六章 だいろくしやう

神 かみ及びバイブルより崇拜 すうはいされる豫言者 ラウウインと「タルムード」

146

第七章 だいななしやう

神 かみ、天使 てんし及び悪魔 あくまに就 ついての「タルムード」の教義 きやうぎ

157

ともはつよし社

第八章 だいはっしやう

「タルムード」の照明しやうめいの下もとに

171

第九章 だいきやうしやう

ユダヤ道德教どうつとくきやうの鐵則てつそく

182

第十章 だいじっしやう

ユダヤ道德教どうつとくきやうの他ほかの鐵則てつそく

205

第十一章 だいいじゅういつしやう

現代げんだいに於おける「タルムード」の意義いぎ

222

結論 けつろん

241

稿を終へて こうをすまへて

243